新春雑感

椿と樫の木 [1]

三重大学特任教授 川口 祐二

伊豆七島に魅せられている。二〇一六年初めから二年がかりで、新島、式根島、利島、神津島、三宅島、そして大島を訪ねた。御蔵島、八丈島、青ヶ島はこれからだ。どの島も一日か二日の滞在であり、それこそ目の悪い者が象をなでるに似た島歩きではある。

大島は他の島へ渡るための中継点として、何度もゆききしたが、人に会って話を聴くということで訪ねたのは二〇一七年一〇月三日が初めてであった。新島、式根島、利島、三宅島は、かつて三重県志摩地方から、テングサ採りに来た海女が、今も元気で島に暮らしているので、その人たちからの聴き取りが大きな目的であった。

それこそ一夜泊まりの旅の者の管見（かんけん）に過ぎぬが、島はそれぞれに違った顔を持っていると、つくづく感じた。旅する者はその顔、つまり島独特の風土に魅せられるのである。利島では、整然と植え込まれた椿の林、今をさかりと咲く紅い花々に立ち尽くしたし、三宅島神着では、樹齢五〇〇年になろうとする柏槙（びゃくしん）の大樹の前で圧倒された。目の高さあたりで二つに分かれた二七メートルの幹が、村の歴史の古さを語っているようであった。島の山から産出するコーガ石の大小を、うまく組み合わせて積んだ石垣の美しさに目をみはったのは、新島の集落を歩いたときである。

魅せられてはいるが、島へ渡るためには、乗り物の出発時刻の把握が必要で、船便によっては、ふた月ごとに変わる航路もある。特に飛行機、ヘリコプターを利用するときの予約、大げさないい方になるが、島渡りは時刻との対決であるといえる。離島への旅は、島へ着くまで気がもめる。着けば着いたで予定通り船が出るか、飛行機は飛ぶか、と心配する。泊まった所も、これが宿か、と思うような整頓の行き届いていない宿泊施設もあり、当たりはずれが多い。それでも、島旅は楽しい。次はどの島へと、思いをめぐらす。

あんこ人形を展示する藤井工房のアトリエ

大島との縁は一冊の本による。『伊豆大島文学・紀行集詩歌編』である。二〇一七年三月三一日に刊行されたことを五月八日発行の本紙の記事で知った。出版は大島町とある。役場へ注文した。三週間かかって届いた。八重の潮路を運ばれて来たとはいえ、何とゆっくりしたものか、と少々不満であった。

しかし、本の出来はすばらしい。余す所なく資料が渉猟され、本の造りも布装である。豪華というよりは瀟洒な一冊というべきか。編者二人は本造りの名人といえる。第一巻の「詩歌編」に続いて、小説、紀行文、それに画家編が加わり、四巻でひと揃いと聞いた。一日も早い完結が期待される。これは大島だけでなく、伊豆諸島全体が誇りうる金字塔となるに違いない。

それにしても、この本が欲しいとなると、役場へ代金を送って買い求めるしか、今のところ他に方法がない。編者は身を切るような思いで、苦心苦労の末に仕上げた一冊だ。その労に報いるためにも、出版元の役場はもっと力を入れて、売り込む努力をすべきではないか。せめて東京の丸善や紀伊國屋の書架ぐらいには常備してもらってはどうだろう。

本のおかげで、編者の一人、藤井虎雄さんとの縁ができた。藤井工房の主である。元町港の近くに丸屋根のあるログハウスを建て、コーヒー店を兼ねながら、あんこ人形を彫っている人である。もちろん椿の木に彫る。仕事の話や、こんどの本の編集の苦心をうかがいたい、と手紙を出したら、いつでもよいと返事が来た。

一〇月三日にアトリエの扉を叩いた。のみ一本で椿の木を彫る仕事を、つぶさに見せてもらう幸運を得た。幸運は幸運を呼び、その日、椿の花びらだけで絹布を染めている女性に会うことができた。金子ひろ子さんである。夢工房という仕事場を訪ねた。道案内は本紙の大島支局の柳瀬洋樹さん。（つづく）